

竹本 忠良（東京女子医大教授）著

「胃と腸内視鏡検査のポイント」

鳥取大学医学部石原内科

田 中 弘 道

消化管内視鏡検査はついに経口観察と経肛内観察が腸内の一点で合流することに成功し、さらには臍、胆道の内視鏡検査へと進もうとしている。日常検査に使用する内視鏡も食道用、胃用、十二指腸用、小腸用、大腸用と多種にわたり、内視鏡専門家といえどもうっかりしていると新しいスコープから取り残されそうな昨今である。

この時期に竹本教授の「胃と腸内視鏡検査のポイント」が出版されたことは誠に意義深い。胃鏡からファイバースコープ通じて器械の開発と胃内視鏡診断学の体系化に全力を傾注された著者が、女子医大に移られてからは恵まれた環境と有能な愛弟子に囲まれて、食道から大腸に及ぶ消化管内視鏡診断学の領域で常に牽引車的役割を果たしてこられたことは周知の通りである。本書は内視鏡診断学の歴史に支えられた不朽の基礎

的知識と最新検査法の要点とを肩の凝らない手法で解説されたものであり、この著者にしてなし得た異色の内視鏡実習書である。

総論には主として内視鏡検査の意義と内視鏡医の心構えについて具体的に記述されており、入門者のみでなく改めて深い感銘を受ける。

内視鏡検査を実施するにあたっての患者への思いやり、検査中の患者心理の把握、使用内視鏡の点検と保管、スコープの保持法等、一字一句著者の豊富な経験からにじみ出た教訓であり、一読して読者の血となり肉となる具体性を備えている。食道、十二指腸、小腸及び結腸の項目はまさに検査のポイントが判り易く述べられているが、何と言ってもハイライトは胃内視鏡検査の項目である。著者が本書のあとがきに「普通のテキストブックに書いていない内視鏡の落穂拾い」と述べているが、

たしかに教科書には書いていないか、あるいは簡単にしか触れられていないことで、しかも実地臨床には極めて必要な事項が入念に判り易く記述されている。使用内視鏡の選び方と胃内観察順序からはじまり、空気の上手な入れ方から偶発症に至るまで具体例を引用した手法は読者の理解を一層深めることであろう。

Compton の囊、内視鏡検査後の頸下腺腫脹等の項目を読むと「あの症例がそうであったか」と思い当たる読者も決して少なくないことであろう。

全体を通じて平易な文章で記述されていることが印象的で、四角四面の項目に従ってない点は気楽な気持ちで本書を通読させてくれるであろう。いわば、臥わって読める感じの本であり、それでいて、忘れていたことを思い出させてくれたり、ともすれば薄れがちになっていた患者への思いやりを反省させられたのが本書に対する筆者の実感である。

この意味で、内視鏡検査の入門書としてだけでなく、十分な経験を積まれた専門家にも是非一読をおすすめしたい本である。

B5・頁 230・図 25・写真 45

原色図 50 ¥ 8,500 千 200

医学書院刊